

千の恋より万の花を  
(仮題)

れ一わ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平成最後のゴールデンウィーク。久々に与えられた長期休暇を積みゲー崩しに使う主人公。寝る間も惜しんでゲーム三昧をした彼だったが徹夜続き故か風呂で眠りに落ちてしまう。しかし次に目が覚めたときには見知らぬ病室で体が縮んでいた。しばらくしてやって来た老年の医者は自身を「将臣くん」と呼んだ。付き纏う違和感。知らないはずなのに知っている事象。主人公の行く末は如何に

# 目次

第1話

第2話

1

8



## 第1話



時は平成最後のゴールデンウィーク。元号の改正という事もあってか珍しく久々の長期休暇にありつけた。降って湧いた一〇日もの休暇に胸踊らせながら帰宅してコンビニ飯をかつ食らい唯一と言っても過言ではない趣味であるゲームソフトの山々を前にさてどれから手を付けるべきかと悩みに悩んだ。

実のところ就職してからというものの買うわいいもののプレイする時間を取れず、しかして次々と世に送り出される新作ゲーム達をとりあえず購入してはプレイすることなくパッケージを見ては満足し日に日に積もって行く所謂『積みゲー』の山が複数できていた。とりあえず目についたものから寝る間も惜しんで消化し続けることはや七日。それでも一向に減らない山に流石に買いきれず若干の反省をしつつもその顔は実にいい笑顔だった。

「あー。もう後三日か……仕事行きたくないなあ」

ぼつりとこぼれた独り言とともにため息を吐いて嫌なことを忘れようと気分を変え

るべく風呂に入ろうかと立ち上がろうと足腰に力を入れ前かがみになったその時、一瞬目眩がしたような気がして思わず額に手を当てる。しかし本当に一瞬のことでも立ちくらみのそれだろうと自己完結して視界の妨げになる手を退ける。

不意にそのゲームが目留まった。

タイトルは『千恋\*万花』所謂『エロゲー』と呼ばれるカテゴリーに属する一八歳未満は購入してはいけない類のソレを引つ張り出すと可愛らしい和装の女性キャラクター達がそこには描かれていた。

「たしか、この手のゲームにしては珍しくハーレムエンドが無かったやつだったっけ？  
えつと白髪の娘がメインヒロインで緑髪の娘がロリババアだったはず」

ぶつぶつと早口言葉のように矢継ぎ早にどんなストーリーだったかと顎に手を当てて思い出す。

話の大筋はこうだ。

主人公、有地<sup>ありちまさおみ</sup>将臣は穂織<sup>ほおり</sup>という田舎町で旅館を営んでいる祖父の元へと母の代わりを手伝いをするべくやってくる。過去に自身も住んでいたことのある将臣は途中旧友らと親交を深めつつ表向き観光客向けであるはずのイベントに祖父の要望で急遽参加することになる。かのアーサー王伝説における選定の剣を抜くがごとくとは到底及ばないが、かつてどんな力自慢でさえも誰も抜くことのできなかった巨岩に突き刺さった刀

をあつさりとはし折ってしまう。

そして言い渡されるヒロインとの婚約&同居生活。穂織の地に巢食う崇り神と呼ばれる謎の怪異現象を解き、無事にヒロインと添い遂げるまでがゲームの大まかな流れだ。

ヒロインはサブを入れて六人。巫女、忍者。ロリ。金髪美少女。妹（従妹）。初心な美女。どれも魅力的な女性キャラクターだった。惜しむらくは個別エンド式でこの手のゲームには往々にして全員が何らかの問題を抱えているのだが全てを丸く収めるルートが存在しないことか。

「現代風の作品でハーレムとは言わないけど流石に全部のルートを見るとこの娘がかなり不憫だよなあ……」

視線の先には緑髪をした少々、いやかなり肌の露出が多い少女の姿を見つめていた。少女の名はムラサメ。主人公がへし折ってしまった神刀『叢雨丸』むらさめまるに宿る存在であり彼女の力を借りることで崇り神を祓はらう事ができる。

数百年前に自身を人柱とすることで叢雨丸の管理者となつて以降穂織の地を見守っていたのだが主人公やヒロイン達による奮闘により御役御免となり彼女の個別ルート以外ではほぼ出てこないか目覚まし時計代わりの耳年増な幼刀に成り下がってしまう。あんまりである。

思考を妨げる様に電子音が室内に響いた。自動湯はりの完了通知である。

「つて、そんなことより流石に風呂に入らないと臭うな。見つけたのも何かの縁だろうしうろ覚えなところもあるからもう一度やってみても良いかもしれないな」

などと一人暮らし特有の独り言を呟きつつ風呂場へと歩を進め寝巻き兼部屋着のジャージを脱ぎさり体を洗って全身湯船に浸かる。「ふいー」などとまるでおっさんのようなしかし心底心地よさそうな声に年食ったなど自嘲しながらだんだんと重くなってくる瞼とお湯の心地よさにいつしか浴槽に体を預け眠りに落ちる。



眩しい。微睡みの中に射し込む光に背を向けるようにもぞもぞと芋虫のようにゆっ



くりと動く。

光に背を向けたことで浮上し始めた意識を再び眠りの世界へと自身を誘うべく暗所を求めてシーツを頭に被ったところで違和感を覚える。つい先程まで、風呂に入っていたはずだ。と。

被ったシーツを下げ、臉を押し上げてあたりを見渡す。そこはおそらく病院だった。夕焼けに染まった室内。白を基調とした壁。同じく白いベッド。

ゆつくりと上体を起こし、室内を注意深く観察する。白い戸棚には瓶詰めにした水が入っており、その近くには木製の机。その隣には乱雑に入れられた本がずらりと並んでいた。

床は光沢を帯びておりつるつるしそうだ。夕日の射し込む窓の向こう側はどうにも見知らぬ地のようだ。少なくともここから見える景色は知らないはずである。どうやら他にベッドは無く個室？ のようにかかる費用を考えるとため息を吐きたくなった。

「風呂で溺れて救急搬送……と考えるのが妥当なのかな？」

自身の現状を鑑みるにおそらくそれはあながち間違いいではないだろうと当たりをつける。

しかし、一体誰が通報を？ とまで考えたところで体に違和感を覚える。癖である考えるときに顎先に手を当てる仕草をした際に自身のそれとは大きくかけ離れたものに

なっていることに気がついたのだ。

「か、体が縮んでいるっ!？」

まさか。そんなどこぞの高校生探偵の様な妙な薬でも飲まされたのか？ と半ば錯乱状態に陥り、一体どうなっているんだと頭を抱えたところで扉が慌ただしく開かれた。

現れたのは白衣に身を包んだ年老いた男性だった。顔はシワで覆われていないところがないのではないかと思うほどに深く刻み込まれた柔和な顔で黒縁のメガネを掛けている。しかし腰は曲がってはおらずまるで老いを感じさせないどこか凄みを感じる。「目を覚ましたのかい。……よかった。心肺が一度停止した時は玄十郎に……」

心肺停止？ 誰が？ 俺が？ だからといって体が縮むなんてあり得るのか？ 否である。流石に医学に精通していなくともそのくらい理解できる。ぼんやりとした頭では続く医者長の長話が右から左へ流ていく。辛うじて川で溺れたらしいことは聞き取ることができたが、これは……。

「夢だな」

現実逃避だった。いや、脳があまりの異常さに処理しきれなくなったというのが正解か。眼前で体調はどうだとか触診をし始める医者に時折生返事を返しつつ夢が覚めるのを待つ。しばらくして問題がないことが確認できたのか医者は目に見えてホッと

した様な表情を浮かべ、そうして名を呼んだ。

「将臣くん」と。

## 第2話



「将臣くん。将臣くん？ 大丈夫かい？」

繰り返すように「将臣くん」と呼ぶ医者。怪訝そうにこちらを窺う彼に思わず顔をしかめてしまう。将臣？ 誰だそれは。俺の名前は……………思い出せない。まるで霧がかかったように自身の名前や友人関係や家族構成、自身がどんな環境で育ち、そもそもなぜ、体が縮んだなどと思ってしまったのかさえもわからなくなる。

元々俺はこの体だっただろう。と同時に思い出されるのはこれまでの記憶。自身の名が有地将臣で母親の名は有地都子。父親の名は有地幸弘。祖父に鞍馬玄十郎を持ち従兄妹には鞍馬廉太郎とその妹である小春がいて……。

ちゃんと覚えている。……はずだ。だというのに、何故か胸の奥がざわつく。

今日は川でと言っても足がつく程度の浅いもので芦花姉や廉太郎達と川遊びをしていたはずだ。

それで…………？ どうなったんだっけ？ そうだ！ 足を攣って溺れかけたんだ。で

も、誰かが……そう、芦花姉が助けてくれたんだっけ。……？ どうして芦花姉が助けてくれたなんて断定できるんだ？ 確かにあの場では芦花姉が一番年上だけど、近くには廉太郎もいたはずで、芦花姉だと決めつけるのはおかしいのではないか？

「……すぐに迎えに来てくれるそうだ。よかつたね将臣くん」

どつぷりと思考の水底に沈んでいた俺はその言葉を理解するまでに少しの時間を要した。考えてもわからないことはとりあえず後回しにして今を見据えるべきだろう。

場所は変わらずここ穂織唯一の診療所。駒川先生こまがわの診察室だ。

普段は穏やかな雰囲気を放つ駒川先生だがいっただったか行われた玄十郎じいちやんとの剣道の立ち会いはまさに烈火のごとくそれはもう凄まじいものだった。その先生に負けず劣らず祖父じいちゃんも時に激しく攻め立て、受けに回ったかと思えば苛烈に攻め立てる先生の剣を柳のようにしなやかに流し柔も剛も併せ持った大立ち回りを繰り広げたのだ。

達人やサムライと言うのは正しく彼らのような存在を指すのだろうと幼心ながらその命を削るかのような激しい攻防に魅入られた。——それでも彼らでは崇り神を完全に祓うことはできない。

ドクン。と大きく心臓が跳ねた気がした。夏だというのに寒気がして体中に鳥肌が立つ。崇り神。……崇り神とはなんだ？ 知らないはずなのにもかしたらと己に問いかける。問いかけてしまった。そうしてまるで最初から知っていたことのように想

起させるは崇り神とはどういふ存在であるか。その発生原因とは。そして――

「将臣！」

突如として発生する衝撃と叫ぶように自身を呼ぶ声が聞こえた。

違和感は、すでにかき消えていた。うつむいていた顔を上げるとそこには両親がいた。泣きはらした顔は本当に心底心配していたようで目は充血しており涙の後も残っていてとても人様には見せることができないそんな有様だった。何故かはわからないがひどく罪悪感が心に重くのしかかる。と、同時にこんなにも自身のことを心配してくれたのだ。と心がほかほかと暖かくなる。

つい、思わず出た言葉は。「ごめんなさい」だった。何故かそう言わなければならないと思ったのだ。――奪ってしまつて。「ごめんなさい。」

その一言とともに両の目から涙が溢れ出す。自身では止められないそれを見て両親は頭を撫でたり背をさすったりともう大丈夫だと。無事で本当によかったと涙ながらに口にしては将臣が生きていることに嬉しさと深い愛情を示すかのごとくしばらく有地將臣の生存を心から感謝した。

「すみません。駒川先生。うちの子が大変お手数をおかけいたしました」

「いえいえ。もし、将臣くんになにかあれば玄十郎の奴に殺されかねませんからな」

「そ、それはええと……」

「ほつほ。冗談ですよ。私も将臣くんが助かって本当に良かったと心から思っております。それから。それに彼が生きているのは彼自身が生きたいと思つたからこそ。私はその手伝いを少しばかりしたに過ぎませんよ」

「それでもつ駒川先生。うちの将臣を助けてくれて本当にありがとうございます！」  
「ほら、あんたも先生にお礼しな」

そう言つて母は手を取つて立たせると早くしろと言わんばかりに後頭部を掴んで少々乱暴に下げさせた。俺は母の照れ隠しだろうとクスリと小さく笑つて大きな声で「ありがとうございます」と感謝を述べた。続けて両親もまた繰り返すように「ありがとうございます」と度々口にした。その声はやはり、少し震えていた。

「何はともあれ無事で良かったよ将臣くん。だけど、いくら足がつくからと言つて川をいや、水を甘く見てはいけないよ。たとえ人は膝くらいの水であつたとしても溺れて死んでしまうこともあるんだからね？ 今後は気をつけるように」

「はい」と素直に返事を返し、川とは関係のないはずの風呂では絶対に寝ないようにしようとして固く決意するのだった。「よろしい」と満足気に頷く駒川先生はすっかり夜になつてしまつた外を見て、「今日はゆつくりと家族ですごしてください」と言つて続けて「問題ないとは思いますが」と念押しして「また明日念の為検査をします」と一時帰宅を勧めてくれた。

「それじゃあ将臣くん。くれぐれもお風呂で寝たりしないようにね。お大事にと。ダメ押しするかのように釘を刺されて俺たちは家路についた。」